

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 172号

平成28年 8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (4)

4月3日

イエスはこれらの譬を語り終えてから、そこを立ち去られた。そして郷里に行き、会堂で人々を教えられたところ、彼らは驚いて言った、「この人は、この知恵とこれらの力あるわざとを、どこで習ってきたのか。この人は大工の子ではないか。母はマリアといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか。こんな数々のことを、いったい、どこで習ってきたのか」。
(マタイ伝 13・53-56)

「彼は木匠にあらずや」、われらの模範は木匠でありました。われらの理想は、貧しき、正直なる、勤勉なる職工でありました。天国はいずれの職業にあっても (不正なるものを除いては) 達することのできる場所です。それ故に、職業選択問題はさほどにたいせつな問題ではありません。もっとも大切な問題は人生問題であります。赦罪問題であります。天国問題であります。われらがこの世にあって何の事業をなさうか、それはわれらにとっては、いたって小なる問題であります。

4月5日

こころの貧しい人は、さいわいである。天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちはさいわいである。彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう。(マタイ伝5・3-6)

偉大なることは謙遜なることなり。無辺の宇宙に対するわれの適當の位置を悟り、神の完全に対するわれの不完全を自覚し、われの責任の大と、これに伴う私の力量の小とを認め、天にたよる、ますます篤く、われを待つ、ますます薄く、真理と人類とのためには身を塵埃の軽きに定めて、われは初めて偉大なる人となるなり。

4月7日

あなたがたのあった試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。(コリント第1書10・13)

神に行きづまりはない。行きづまりは人のことであって、神のことではない。神が時々、人をして行きづまらしたまうは、人が彼(神)によりて新たに運命を開かんためである。「神はすべての人をあわれまんために、すべての人を不順(反逆)の中に閉じこめたまえり」(ロマ書11・32)とあるがごとし。人が自分で自分を助け得ると思う間は、次第次第に窮境へと追いつめらる。されども、ひとたび自分に助けなきことを悟り、上を仰いで神の助けを祈り求むれば、恩恵の道は彼の前に開けて、彼は無限の神の園に無限の自由を楽しむに至る。

「この苦しむ者、叫びたれば、エホバ、これを聞き、そのすべての悩みより救い出したまえり」(詩編34・6)とあるがごとし。

4月12日

神は、あなたのすえを地に残すため、また大いなる救いをもってあなたがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされたのです。それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神です。神は私をパロの父となし、その全家の主とし、またエジプト全土のつかさとされました。
(創世記 45. 7-8)

エホバともにいまして、境遇のいかんは問題にならない。すべての境遇が彼の栄光をあらわすに適している。「正しき人は患難多し。されどもエホバはみなその中より助け出したもう」とある。そして彼に正直勤勉の霊を与えて、彼を助け出したもう。境遇そのものに救拯（たすけ）の途が備わっている。別に手段方法を講ずるに及ばない。置かれし地位にありて、勤勉で、正直で、忠実で、彼におのずから救恤の途が開かれるのである。ヨセフの生涯においてとくに注意すべきは、彼が神の愛子でありしにかかわらず、奇跡のこれにあらわれざりしことである。彼の立身の道は平凡であった。そしてエホバともにいまして、平凡の道は奇跡以上の奇跡である。

4月13日

ああ深いかな、神の知恵と知識の富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。「だれが主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか」。万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アアメン。(ローマ書 11・33-36)

イエス・キリストの御父なる真の神は、人にかまわず、その聖旨をおこない給う。その意味において彼は独裁君主である。彼はご自身の御計画に従い、万物を造りたまひ、人を造りてそのあと御計画を実行せしめたもう。神のための人であって、人のための神でない。天と地とそのうちにあるすべての物は、神のために作られたのであって、人のために作られたのではない。ゆえに人の生涯もまた神の御計画を成し遂げるために価値あるのであって、幸福を楽しむがためのものではない。私がもし本当に私の存在の意義を悟るならば、私が恵まると恵まれざるとは問題ではない。私の生涯によって神の聖意が幾分なりと成れば、それで私の世につかわされし目的が達したのである。私はどうなってもよいのである。神の御事業が成ればよいのである。そして私の生涯がその御事業達成のために幾分なりともお役に立つならば、私の光栄この上なしである。…

4月17日

見よ、兄弟が和合して共におるのは、いかに麗しく楽しいことであろう。それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、アロンのひげに流れ、その衣のえりにまで流れくedarようだ。またヘルモンの露がシオンの山に下るようだ。これは主がかしこに祝福を命じ、とこしえに命を与えられたからである。(詩篇133)

イエスは言い給うた。「2人3人、わが名によりて集まれる所に、われもまたその中にあるなり」(マタイ伝18・20)と。これは、イエスは大集会よりも小集会を好みたもうということではない。単独よりも会衆を愛したもうということである。ひとり祈りて聞かれざるにあらずといえども、衆人心を合わせて祈る時に、神はことさらにその希求(ねがい)を受けいれたもう。これ声の多きがゆえにあらず、一致団結を愛でたもうがゆえである。神に仕うるに愛をもってする必要がある。神に対する愛をもってのみならず、相互に対する愛をもってする必要がある。兄弟相愛するの愛は、人が神にささげ得る最大最善の供え物である。2人3人相和らぎて祈る時に、イエスは和気あいあいたるを喜びて、その中にいましたまう。そして和らぐ者が多ければ多きほど、その集会の座を喜び給う。…

4月21日

いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜った恵みを悟るためである。(コリント第1書2・11-12)

深きかな、霊、霊は容貌にあらず、風采にあらず、学問にあらず、境遇にあらず、遺伝にあらず、はたまた行為にもあらず、道徳にもあらず。霊は霊にして、人の深き所に存す。「人の内なる思いと心とは深し」(詩篇64・6)。神の霊のみ、よく人の霊を知りたもう。人は外よりこれを覗^{うかが}うて、その何たるを知るあたわず。人が人をさばくあたわざるはこれがためなり。ゆえに彼は言いたまえり。

わが見るところは人に異なり、人は外のかたちを見、エホバは心を見るなり。(サムエル書16・7)

4月22日

しかし、神の霊があなた方のうちに宿っているなら、あなた方は肉に折るのではなく、霊におるのである。キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。(ローマ書8・9)

クリスチャンはキリストである。キリストの信者ではない。彼の弟子ではない。彼のしもべではない。キリストご自身である。自己(おのれ)は死して、キリストが代わって生きたまう者である。ゆえにクリスチャンは、すべての点においてキリストのごとき者である。彼のごとく、上より生まれ、彼のごとく、神に導かれ、彼のごとく、世に憎まれ、彼のごとく、十字架を担い、彼のごとく死して、彼のごとく昇天する者である。四福音書にしるしてあるキリストの一代記は、写してもってクリスチャンの一代記となすことができる。

クリスチャンが神の子であるは、キリストが神の子だからである。クリスチャンがよみがえるは、キリストがよみがえりたもうたからである。クリスチャンに永生が有るは、キリストにそれが有るからである。キリストに有るものはすべてクリスチャンに有る。キリストに有り、また有ったもので、クリスチャンに無いものはない。

4月25日

すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。(使徒行伝2・38)

かくてキリスト教は自力教にあらず、また他力教にあらず、聖霊教である。人に努力を要求すると同時に、上よりの援助を約束するものである。「救いを全うせんとして努めよ。神、なんじを助けたまえばなり」と教うるものである。ゆえに信者はおのが努力において神の援助を認むるのである。私が神を求め、私の罪に泣き、神の前に聖からんと欲し、私の努力の足らざるを嘆くは、これ私がなすことであって、実は神が私にありてなしたもうことである。「聖霊みずから、言いがたき慨歎(なげき)をもて、われらのために祈りぬ」(ロマ書8・26)とあるがごとし。聖書の慨歎が私の慨歎として神に達するのである。ゆえにかかる場合において、私は、私に言い難きの慨歎あるを感謝すべきである。多くの場合において、私が私自身について不満をいただくその事が、神が聖霊をもって私の内に働きたまいつつある証拠である。自力でもよい。他力でもよい。あるいはみずから努め、あるいは神に助けられて、とにもかくにも救われて、死にたる者のよみがえりにあずからんことを(ピリピ書3・21)

4月28日

主よ、わが心はおごらず、わが目は高ぶらず、わたしはわが力の及ばない大いなる事と、くすしきわざとに関係いたしません。かえって、乳離れしたみどりごが、その母のふところに安らかにあるように、私はわが魂を静め、かつ安らかにしました。わが魂は乳離れをしたみどりごのように、安らかです。(詩篇 131・1-2)

まことに神は公平でいましたもう。彼は天才を少数に賜いて、多数を顧みたまわないのではない。かえって、より善きものを多数凡人に賜いて、彼らを祝福したもうのである。凡人たるの幸福または特権は大である。神が何人にもたましい意志の力をもって、何びともなし得る事をなすのである。神の造りたましい宇宙において、平凡は決して平凡でない。凡人もまた神に似て造られし者である。そして神を現わす点において、凡人は天才以上である。われら何人も、持続せる忍耐と勤勉をもって、「偉大なる凡人」たるべく努むべきである。